

D-23  
D-16

D-16

リオグランデ・ノール州の  
日本人入植者

E700  
23  
AL71

1-収録

リオグランデ・ノール州の  
日本人入植者

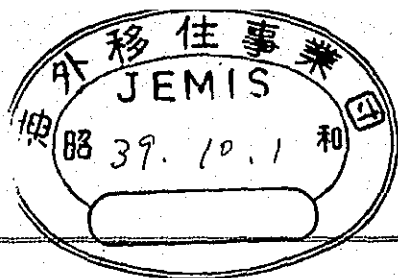
海扱簿

JICA  
703  
234  
EA  
LIBRARY

リオグランデ・ノール州の日本人入植者

国際協力事業団

受入 月日 84. 8. 14	703
登録No. 02918	23.4
	EA



## § リオ・グランデ・ド・スール州の日本人入植者

(サンパウロ支部職員の調査報告による)

### 1. 入植者概況

リオ・グランデ・ド・スール州は大部分がカンポ地帯で、伝統的な大ファゼンダ農法による牧畜と米作を主として来たため従来、野菜の不足に悩みながらも蔬菜栽培は、ペロッタス近郊で僅かに行われているのみで、あまり顧りみられなかつた。偶々ペロッタス近郊一帯が水害を蒙つたため、(ペロッタスからリオ・グランデに至る一帯の水害の後は予想以上にひどく、生々しい惨状を呈していた。) 一般にトマトを始めとし、蔬菜の需用が更に増加し、例年以上の高値が続いたため比較的被害の少なかつたポルト・アレグレ近郊からサンタ・マリヤに果樹・蔬菜・養鶏及び米作等の分益農として入植している日本人移住者の大部分が思わぬ蔬菜ブームに恵まれ、彼等の営農成績も上々と見られている。(但し、ウルグアイアーナからリブラメントに至る国境地帯の被害はまだ回復していない模様である。) 勿論これ等移住者達は単に偶然的な蔬菜景気にのつたわけではなく従来、ブラジル人の間で蔬菜栽培には不向きとされていた土地に、良い品種のものを栽培し、また施肥を行うことにより、始めておさめ得た成果であることは言うまでもない。

(1310)

59. 6. 25

JICA LIBRARY



1024296[03]

(1) サンタ・マリア： 現在、ノノ家族（サンペドロ耕地＝ウルグアイアナからの転耕者）が分益農として果樹の手入れ及び蔬菜栽培に従事しているが、永年の経験者である木村氏（サン・ペドロ耕地に日本人移住者を導入した人である。）を指導者として当地のブラジル人間の反響も極めて良好である。一方、入植者の営農状況は、トマトノキ口が30～40クルゼイロ、アルファッセ（チサ）が7本5クルゼイロ（入植者はサンタ・マリア市にある2ヶ所の市場に売店を有しており、売店では、客の需要に應ずる為、30日から40日位のアルファッセを並べている。）の高価が続いているため、殆んどの入植者が1ヶ月ノ5ゴントから20ゴントの収益をあげており大半が4分も、又は折半の分益農であるから、生活費（3～4ゴント）を差引いた純収入は3ゴント乃至5～6ゴント程になる。なお、木村氏は、入植者の生活は大分安定し、今年の本頃迄には、土地を購入する者も出てくるであろうと述べている。

(2) カマクワン入植者： 1家族（F県出身者）が脱耕したが、主な原因はパトロンとの契約がはつきりしていなかつたためと思われる。契約は果樹歩合作で間作を認めるしということだつたが、果樹（オレンジ）は、2年生のものが大半で、まだ収益をあげるには至っていない。従つて、問題の入植者は間作による収入を期待し、パトロンに、しきりに肥料の貸与を求め、一方、パ

トロンは、間作が果樹に悪影響を与えることを恐れ、両者間の摩擦が昂じたものである。

しかし、1958年3月末に入植した13家族は3家族を除いて営農成績も上々である。これら3家族はいずれも下乗出身で、そのうちの1家族の土地の手入れは他と比較し一段と劣っている。「あまり働かない為、自ら脱耕せざるを得なくなった」という批判もあながち否定できない。

次に、北海道出身G氏の営農収支（33年4月より34年7月迄）を記す。

営農収支概算

北海道出身 G 家族

稼働者 4名

耕地 6.5町歩, 牧場 1.5町歩

採乳牛 2頭 果樹 2千本(オレンジ)

収 入		支 出	
(1) 農業粗収入	120,000 <sup>クルゼイロ</sup> (300,000 <sup>円</sup> )	(1) 生活費	28,000 <sup>クルゼイロ</sup> (70,000 <sup>円</sup> )
トマト	80,000 (200,000)	(2) 営農費	8,000 (20,000)
アルファルセ・キツリ オレンジその他	40,000 (100,000)	(肥料, 農薬, 種子)	
(2) 営農資金より	4,000 (10,000)	(3) 営農資金(込み)	4,000 (10,000)
(3) 借入金	32,000 (80,000)	(4) 借入金返済	32,000 (80,000)
合 計	156,000 <sup>クルゼイロ</sup> (390,000 <sup>円</sup> )	合 計	72,000 <sup>クルゼイロ</sup> (180,000 <sup>円</sup> )

差引残高 84,000<sup>クルゼイロ</sup> (210,000<sup>円</sup>)

〔註〕 パトロンとG氏との契約は4分6分の分益であるため  
G氏の収入は50,400クルゼイロ(126,000円)とな  
る。但しG氏のパトロンは、パトロンの取り分33,600  
クルゼイロ(84,000円)を、来年度の営農資金に廻す  
ようG氏に貸与している。

このカマフワンでは、組合結成の動きはまだ見られないが、ノケ月にノ度家長会議を開いている。現在の所生産物はカマフワン市内で販売しているにとどまっているが、今後生産が高まれば、ポルトアレグレ市に出荷する必要が生じ、これにともなつて組合も結成されるものと思われる。入植のオ一の目的である定着については、大半が成功していると見てよい。

- (3) ノーバ・プラタ ここには昨年ノ2月ジユスチーナ耕地から転耕した移住者がノ家族分益農として入植している。入植後の期間が浅いので、今のところはつきりした営農収支は不明であるが、ブラジルスコロノの請負つている土地と比較して、手入もはるかにゆきとどいており、成績も良いためこの地のパトロン達に大きな反響を呼んでいる。このため、パトロン達は日本人移住者の導入に大きな関心を抱いている。

ここは、海拔820mの小都市（人口約3万2千）で、当市を中心とする山岳地帯は、冬には霜も相当おり、地形、気候ともきわめて日本的である。主産業は、養豚、菊苗、木材等であるが、土壌並びに水利の硬も良く、蔬菜、果樹栽培の適地でもあり、将来は、ラゴア・デ・バルメーリヤから北に抜がるカンポ地帯への蔬菜、果樹および鶏卵等の供給地として日本人移住者の活躍の舞台に極めて有望と思われる。

2. 上述のようにポルト・アレグレ近郊、サンタ・マリアおよびノ

ーバ・プラタにかけて点在している入植者は、その殆んどが嘗て農業成績も順調で定着の基礎を固めつつあるが、その理由としては、

- (1) 気候が日本に似て比較的穏和であること。
- (2) 蔬菜、果樹栽培の分益農は、労力がコーヒー園コロノ等と比較してはるかに容易であること。
- (3) リオ・グランデ・ド・スール州全般が牧畜、米作を主とし、日頃蔬菜不足に悩んでいるため新鮮な野菜を常時供給する日本人移住者は、ブラジル人の間に好評を博し、一方入植者側も生産物を容易に換金出来ること。
- (4) 日本人の農業技術と熱心さが高く評価されており、また現在のところ耕主の殆んどが果樹、蔬菜栽培を片手間の仕事としているが、日本人を分益農として導入したことで思わぬ収益をあげ、非常に好意的であること。

等が考えられる。

現在この地方に入植する移住者は殆んどが分益農（果樹、蔬菜、養鶏）として入ることになるが、蔬菜、養鶏の場合は、努力と研究次第で、比較的短期間に生産を高めていくことが出来る上、換金も容易であるため、早期独立の見込みも期待される。



